

E. Ginzberg & H. Berman : The  
American Worker in the Twentieth  
Century

— A History through Autobiographies —,  
The Free Press, N. Y., 1963

長 沼 秀 世

—

「一国の眞の歴史は働く人々の労働や生活を知らずには認識し得ない。」という立場から本書の研究対象は定められる。具体的には著者は、「平凡人の平凡な生活の事実、一般的なアメリカ労働者の状態のバランスある像」を見出すべく、「労働者が記した一次資料によりその生活史 Life history」を描こうとする。

この問題設定に続いて、著者は以前の歴史・経済・社会学における労働者の取扱ひ方を批判し、本書の視点の独自性を主張する。「わが国（＝アメリカの）歴史学は主に政治・軍事・外交史の分野を扱い、経済史は大して盛んではなく、同系列の労働史も全歴史研究中では重要分野を占めていない。労働史研究は、主に制度・機構的なもの、特に労働組合に集中され、労働者自体に力点をおかない<sup>1)</sup>。経済学では、労働力需給分析・団体交渉機構・労働組合運動と価格水準との関係等が主な問題で、

やはり労働者自体は注目されない。社会学は前二者よりも実の人間に焦点をあてているが、主として社会病理的接近で、特殊・限定的である。人間関係論は経営の視点からなされ、労働者の全生活には関係しない。かくて諸学問分野では、労働者の労働や生活は十分に描写・評価されていない。また労働者の仕事・経験・環境・思考等が焦点をあてられるにせよ、労働者個人の記述は用いられていない。そのため、この七〇年間の労働者の生活の諸側面における大きな変化、それへの労働者の反応は十分に知られていない。これらを知り、労働者の生活について眺望を得るため、生活史という研究方法をとる。この方法で、労働者の主観と客観、現実と期待の相関関係を研究したい。」

つまり本書は、以前の、労働者を扱った諸研究より一歩前進して、生きた人間を描こうとする意欲的なものといえよう。その点で本書は、いわゆる労働史あるいは労働運動史ではなく、より社会的な労働者史とでもいうべきものであろう。

さて本書は五部に分けられ、以上に紹介した一・二章が第一部である。第二・四部は最近七〇年間を区分した三期の記述にあてられ、各部は、予備知識たる各時期の背景・本論にあたる生活史・まとめの三章よりなっている。第五部が全体の結論である。なお著者の内、Ginzbergはコロンビア大学経済学教授、Berman はミネソタ大学歴史学準教授である。

二

生活史は全頁数の三分の二を占め、九三の資料よりなっている。諸資料はほとんど全産業の労働者にわたり、地域的にも広汎で、労働者の多様性を反映せんとしている。これら生の資料から、我々は、ある時代のある職業の労働者の仕事の実態・賃金・労働時間・作業環境から、食事や余暇利用等の生活状況・生計費用、労働組合やストへの対処・思考方法、さらに生活感情や将来の見込み等、多方面にわたる興味ある事実を知り得る。以下、各時期の資料から目につくものを拾ってみよう。

第一期は、第一次大戦前で、そこには次のようなものがある。「あらゆる買物を会社直営店で他より高値で買わざるを得なく仕組まれている鉱山町の生活。貧窮の底で病気になるにつつも、『アメリカ市民だから慈善にはすがらない』というアメリカ的独立個人主義を述べる鉱夫。『外国より給料も生活も良い』という移民労働者と共に、他方では、失敗して『こんな国に来るのではなかった』と帰国する例。『同じ食卓で雇主と食事できるからアメリカは民主主義だ』という単純素朴な農業労働者。『国家以外の何よりも組合に忠誠を誓う。組合が我々に自立感を与えた』という畜肉処理労働者。女中周旋屋の搾取ぶり。丈夫でなければ死ぬ他ない悪生活条件・低賃金が『アナキストを生み出す』という衣服労働者の状態。マルセーエーズを歌ってビケをはった女工。病気の五歳の子供が働き、昼食時には食物を口にしたまま居眠りしている南部の綿紡工場。『数年前の無一文が今では七百ドルも溜った』という靴磨きの青年。等々。」

第一次大戦以降、第二次大戦前迄の第二期になると、次のよ

うな事例がある。「いつでも Hurry up! と叱咤され、不幸と感じ、神経を参らせ、体重も減る製鉄工。他方、『重労働だが給料も待遇も良い』と喜ぶ同業者。子弟・知人しか加入させない特権的・閉鎖的な映写技師の組合。かのホレイシヨ・アルジャ<sup>(2)</sup>の話を読む商店員。法定労働時間を四時間も超えて働き、さらに日曜も働かされる一方、無料保険の恩典を与えられる石油労働者。『事実上の奴隷制』と悪労働条件を訴える南部の紡績工。一生、地主に仕えねばならず、昼食は取れず、カーテン地も買えぬと嘆きつつも、『労働促進局<sup>(3)</sup>を考え出すアメリカが誇らしい』という小作農。パンもなく医者にもかかれぬ不況下の女工一家。生活の苦しさから、ストの正しさを知りつつもスト破りをする機械工。組合に反対し、『天なる主が面倒をみてくれるし、貧乏は天国につながる』という靴工。地主のベルで早朝起こされ、馬上の監督が見廻るブランテーション<sup>(4)</sup>で、六歳から働く黒人少年。組合と自衛団の双方が棍棒をかざすストの有様。一日の稼ぎのほとんどを用具代にとられ衣食に事欠く炭鉱夫。また、組合員共産党員としてサンジカリスト法で捕まり、さらにテロで殺されかかる炭鉱夫。大量生産工業におけるアメリカ最初の座り込みストの状況。予防措置なく珪肺で死ぬ多数の黒人労働者。強制立退に抵抗し殺される失業委員会。特定人種のみ就業し得る建築労働者の実態。等々。」

第二次大戦以降の第三期のものでは、次のような事例がある。「共和党員だがF・ルーズヴェルトを支持し、今なお彼の死を惜しむ鑄造工。『コンヴェア・ベルトに監督されている』

と、仕事に満足感を感じず、『自分は唯の齒車だ』と、疎外感を訴える自動車工。他方、同様の職業ながら齒車たることを積極的に肯定する者。ストップ・ウオッチで測る能率測定の不当さを不満とし、さらに『仲間が兼農のため、低賃金に抵抗せず組合を弱める』と嘆く機械工。『組合が熟練工のみに利益を与え、自分らを守らぬ』と嘆く工場守衛。自発的C I O組合運動員となり活動せんとして、テロを加えられる繊維女工。組合機関の腐敗に対し、一般選出代表による運営を望む港湾労働者。閉山のため失職し、飢餓状況にある元炭鉱夫。組合が人種差別をしない事を喜ぶ研磨工。他方、特定職種が人種により制限され、組合からも制限される畜肉処理工。『いつも、もっと欲しいと思う。これがアメリカ人のあり方だ』という機械工。単調な仕事を嘆きつつも転職を不安とし、『未来はつまらぬ暗いもの』という事務職員。等々。』

## 三

本書の価値は以上の如き諸資料の示す具体的事実であり、その点は著者も『本書の中核は労働者の個人的記述である。広汎に列挙した資料に読者が直接反応してほしい』と記している。また、これらは、アメリカの労働に関して日本人の持つ通念が幾多の点で誤っている事を教えてくれる。しかし著者の真の目的は、資料の単なる提供ではなく、二十世紀におけるアメリカ労働者の生活の変貌の全体像を描く事にあり、それは各時期毎のまとめ及び結論たる『アメリカ労働者の連続性と変転』に示

されるのである。

まず第一期は『自由経済の時代』と特徴づけられ、次のようにまとめられる。「この時代の労働者の背景・状況・目的・希望は多様であり、一般化は困難である。だが総じて、大多数の労働者は日の出から日没迄労働し、週六日制だった。しかし苦汗労働とか契約労働では、より長時間または日曜も働く労働者が多かった。だが労働者の多くは欧州各地からの移民や農村から移住した者で、労働日の長さを特に苦痛と考へなかつた。むしろ主たる不満は、相当に多い労働災害に対してだった。作業環境は劣悪で、関係法規がごく少数ながら存在したものの、それはほとんど守られなかつた。しかし当時の労働者の生活について、貧困線ストレスという印象は正しくない。大抵の労働者族家には十分な収入があり、蓄貯も可能だった。食事も基本的必要を十分満たすものだった。多くの者が明日に希望をかけ、未来を抵当に家屋を購入した。新移民流入により、既存労働は自然に職業階梯を上昇でき、全体的にも就業機会が多かつたので、多くの労働者は満足できた。」

第二期は『経営者経済の時代』として『新時代と大不況』の二期の労働者の状況が次のようにまとめられる。「一九二九年迄の繁栄期には、移民の減少・並びに第二次大戦及び二〇年代の好況により、労働市場は労働者に有利となり、労働条件は改善された。また、労働者の等質化・教育水準の向上・連邦政府の経済過程介入・州のた保護立法等も、労働者の諸条件を向上させ、労働者に希望をもたせ。二〇年代には政府の経済活動は

低下したが、その機能は洞察力ある実業界指導者に移され、諸企業において労働条件改善・保険給付等が『福祉資本主義』の名で行なわれた。もちろん、これらは組合運動発展の予防及び技術革新下の生産性向上確保のためだった。この時代、労働時間は短縮され、実質賃金は上昇し、肉体的疲労度は軽減された。自動車・ラジオの普及で、労働者の広汎部分に満足感が浸透した。また相当数の労働者が不動産や株式の投資に加わった。これは全労働者の一部であつたにせよ、その成功例が一般的な繁栄の雰囲気醸成し、労働者に期待を抱かせた。

次の三〇年代は混乱と絶望の時代である。二〇年代の幻想から樂觀気分が強固に持続していたが、労働者の諸基準は低下し、第一次大戦以後の労働条件向上分は一挙に失われた。一般の統計数字は労働者の苦しみを十分に示していない。かくて『アメリカは機会の国』という夢は消えた。しかしF・ルーズヴェルトにより再び希望が与えられた。実際に、団結権・社会保障制度・大規模な失業対策事業が労働者に与えられた。労使間の相対的力関係は大きく変化した。だがこれらの努力にもかかわらず、失業問題は未解決だった。

『混合経済の時代』と把握される第三期における労働者の状況は、次のようにまとめられる。「現在の労働者の半数以上は三〇年代の不況を知らず、満足感が支配的である。工業の農村進出により、兼業労働者が増え、彼等は総収入の上昇で貧困から抜け出し中流の生活を営めるようになった。黒人の労働者化も進展し、技能階梯の上昇が黒人にも可能となった。しかし白

人の労使双方の偏見による人種差別が、黒人の職業選択・技能階梯上昇の障害となっている。労働者は一般に、経営者の重圧を感じつつも、生産性向上・労働条件改善の一連の措置に対し、経営者の望む方向に反応し、その措置を受け入れている。だが不満感や労働者間に残存している。近年、職業階梯間に溝が生じ、その格差は拡大し、労働者が管理職につくことは困難になり、特に大組織では労働者の昇進は難かしくなった。だが経営者は、技術革新による生産性向上のための労働者の士氣確保・並びに最大利潤でなく安定成長を望むところから、労働者の諸要求に対し高い反応を示している。かくて労働条件・生活水準向上の見込みは一層大である。とはいえ、最近、労働力需給関係が悪化している面もある。だが『豊かな社会』から一層成長する課題は未開拓の分野であり、この課題解決いかんが労働者の将来を大きく決定するだろう。」

#### 四

前節に示した各時期のまとめの後、著者は結論として、ほぼ次のように記している。「労働者における労働と生活との変貌は広汎なものだった。労働時間はこの七〇年間に約四割短縮され、作業環境は質的変化をとげ、事故率も大幅に減少した。労働内容では肉体的緊張度は大幅に緩和されたが、労働過程合理化の結果、労働者は時計の支配下におかれるようになった。労使関係における変化も本格的で、初期の経営者の恣意的権力行使は大幅に制限されるようになった。労働組合の成長は労働者

の福祉向上の主要決定因の一つであり、組合は労働者の意志表明の正式機構となり、利潤分配の面でも組合は有効に機能した。労働者対政府関係においても重大な変化が生じた。今世紀初頭の三〇年間、政府は労働者に冷淡だったが、F・ルーズヴェルト登場以来、全体の根本的变化と共に、労働者が政府から得るところは大きかった。以後この傾向は存続・深化し、労働者は一層政府に助力を求めており、政府は一層労使関係に介入してきている。また社会保障制度の制定・それに関係する付加給付制も労働者の諸基準向上に寄与した。生活面での変貌も大きく、労働者は、世紀初、何とか生活し得た程度だったが、その後の実質取得分・政府サービスの向上で生活水準は大幅に他国に見られぬ上昇を示し、豊かな生活を送れるようになった。かつては移民労働者等でアメリカ社会に同化していない者が多かったが、今では労働者全体がアメリカ市民として社会の必須部分となり、十分な所得・政治力・社会的地位を得ている。

さて労働者の将来だが、一層統くだろうオートメーション化の労働者への影響は、既に、現実の失職と共に新規労働力の吸収弱化に現われている。この労働需要不足は組合側の労働時間短縮運動を強化させるだろう。技術進歩と労働時間短縮は関連している。またオートメーション化は、高等教育・高級技能所有者と他の労働者との差異を拡大し、そのため職業・社会構造が硬化するかも知れない。そこで一層、教育・訓練機会を労働者子弟に拡げる重要性が高まる。これによってのみ労働者はアメリカの夢を実現できよう。今後、経済の大崩壊または戦争の

破局は予想されない。そこで労働者の希望と目標との実現の傾向は続くだろう。労働者の一層の向上には、世界市場での競争状況・並びに自由世界の指導者として直面する諸挑戦への国家の態度が関係しよう。これらに対し、労働者がどれだけ国家を支援するかということに、労働者の未来はかかっているのである。」

## 五

以上簡単に内容を紹介したが、まず評者が感じるのは、個々の資料の面白さに比較して、各時期のまとめ及び結論が平凡でつまらない、ということである。しかしこれは、具体的多様性を一般化する時、当然生ずることかも知れない。また、長期的にみて労働者の生活・労働条件が向上したのはごく当然である以上、平凡な結論が出ざるを得ないのである。それはともかく、本書のまとめ及び結論のもつ現状肯定弁護論的傾向に対しては、評者は批判的ならざるを得ない。たとえば第一次大戦前の時期のまとめで、著者は労働者にとり、「長労働時間は苦痛ではなく、生活は満足できるもので、希望も明るいものだった」とし、その根拠を当時の労働者個人の心理に求めている。だが「以前と、または外国と比較して良い」という形の現状肯定は、極端に言えば奴隷にも可能な見解である。かかる当時の労働者の現状肯定を直ちに容認する事は、研究者から、その時代の矛盾発見・批判形成力を除き、結局は一切の現状肯定弁護を生み出す保守的態度を研究者に取らせるのではなからうか。

歴史研究者は、当事者の主観的評価をもってそのまま当時の評価とするのではなく、現在の基準から分析し、評価し、批判する事が必要なのではなからうか。もちろん、過去に對し、研究者は、ただ単に現在から分析・評価・批判をするだけでなく、当時の評価等を知った上で、なおかつ現在から分析・評価・批判すべき事はいう迄もなからう。実はこの問題は、客觀事實データよりも主観的資料に主に依拠して、当事者の心理状態を知る事に力点をおく、著者の方法にかかわってくる訳である。

『生の人間』を強調する余り、労働者個人の記述やインタビュー資料のみを重視する方法に、評者は疑問である。

著者の現状肯定弁護論的傾向は、結論において一層明瞭になる。「現在、アメリカの労働者は十分な所得・政治力・社会的地位を得ている」といった記述は、アメリカでは一般的かも知れない労働者中産階級論・階級不在論・民主主義論の安易な承認にすぎないのではなからうか。また、統計的平均値を見ることにより、たとえば「黒人家庭の平均収入は、欧州で一級のイギリスの平均より大きい」とか、「他国には見られぬ生活水準の上昇」ということを著者は誇るが、この評価は、貧困の存在や矛盾を過小評価させるのではなからうか。著者は序論部分で、歴史学者の労働者輕視とか経営史の会社史化による批判性低下を指摘しているが、ここでは著者自らアメリカの諸現実に批判を抱いていないのではなからうか。さらに「労働者は、自由世界の指導者たる国家を支援する事で、アメリカの夢、労働者の希望と目標を実現するだろう」という意味の記述は、評者

に、単なる現状肯定弁護をこえた宣伝臭すら感じさせるのである。著者がオートメイション化等の点で若干の不安を抱きつつも、なおこのように記するのは、学問以前の信念の問題かも知れない。この他「タフト・ハートレー法やランドラム・グリフィン法<sup>(5)</sup>は弊害是正をめざしたもので、組合破壊をめざしてはいない」かと、「近年の組合成長の鈍化・動的イデオロギー欠如に對し不安をもつ必要はない」、あるいは「経営者は一般に、最大の利益よりも安定成長を求める。特に大企業の経営者は雇われ経営者のため、自己の利害にとらわれない。そこで経営者は労働者の要求を良く受け入れる」等の記述に對しても、同様の批判を与える事ができよう。

次に、著者が独自性を主張する『生活史』とはいかなる意味をもつのか、という点が不明確である。評者の理解によればおよそ次のようにならう。まず『生活史を描く』という時、『生活史』とは『生活の変貌の状況』の意味であらう。つぎに、資料として『生活史』という時には、『労働者自らが、自己の生活状況を描いた記録』の意味であらう。さらに、『生活史という研究方法』とは、『生活状況を描いた資料から、一定の像を再構成する方法』という意味であらう。ともあれ、著者はこの用語を自己の重要な主張として用いるのであるから、この用語の定義なり概念なりを明確にすべきであらう。また、用語はできるだけ一義的に使用されることが、著者と読者とのコミュニケーションを、一層円滑にするであらう。

その他、細かい点でも幾つか批評しうる。たとえば時期区分

で二〇年代とニュー・ディール期を一括して「経営者経済の時代」としうるかどうか疑問である。これらを一本にしたのは、余り妥当でないように思われる。またこれは、著者自身が結論ではニュー・ディールをもって一区切りとしているのと矛盾するようである。資料の点では、排列方法において、時代的に入替えた方が良いと思われる事例が幾つかある。また相当広範囲の産業から資料がとられているが、鉄道とか電気・電機産業の資料はないようだし、石油・自動車等の資料は重要度に比較し、少なすぎるように思える。さらに、インタヴューによる資料に、資料蒐集年が示されていない点も惜しまれる。

以上、少々批評を加えたが、本書のもつ資料的価値は十分認められるものであり、それは興味ある貴重なものだという事を記しておこう。

(1) これらに続けて著者は次のように記している。「総じてアメリカの歴史研究においては、経済発展に関して企業者の役割に焦点がおかれている。歴史学者が労働者に十分な関心をもたない理由として、次のような点が考えられる。産業労働者の多くが移民つまり外国人であり、アメリカ化に時を要すると考えた事。労働より所有の問題を歴史学者が重視した事。階級移動への強い信頼から、労働者

自体より上昇し経済発展のこととなる者に歴史学者が注目した事。さらに歴史家は主として労働者の子弟でないため、労働者に対し同情的理解を示せない事。この歴史学批判は、著者が意図しないだろうアメリカ歴史学の階級性批判となっている、と見られよう。また著者は、経済史研究の中で近年、経営史が盛んな事にも触れて「その多くが会社史記述であり、これはしばしば、歴史家としての批判能力の全面的展開を制限するものである」と記しているのも面白い点である。

(2) アメリカで有名な出世物語の作者。

(3) WPAと略称されるニュー・ディールの失業対策雇用機関。

(4) この事例は一九三七年のことであり、さらに「父が来年借地するには、この子供の労働が必要だし、常に地主に借金している」と記されており、当時のシェアクロッパ制が奴隷制に近い隷属状況にあった事を示している、と見られよう。

(5) 両法は、各々、一九四七年及び一九五九年に制定された労働関係の法律である。

(64・4・20) (一橋大学大学院学生)